

新版 等幅

破提字子と云う天主教を弁難した書物のある事は、知っている人も少くあるまい。これは、元和六年、加賀の禅僧巴毗弁なるものの著した書物である。巴毗弁は当初南蛮寺に住した天主教徒であったが、その後何かの事情から、DS如来を捨てて仏門に帰依する事になった。書中に云っている所から推すと、彼は老儒の学にも造詣のある、一かどの才子だったらしい。

破提字子の流布本は、華頂山文庫の蔵本を、明治戊辰の頃、杞憂道人鵜飼徹定の序文と共に、出版したものである。が、そのほかにも異本がない訳ではない。現に予が所蔵の古写本の如きは、流布本と内容を異にする個所が多少ある。

中でも同書の第三段は、悪魔の起源を論じた一章であるが、流布本のそれに比して、予の蔵本では内容が遥に多い。巴毗弁自身の目撃した悪魔の記事が、あの辛辣な弁難攻撃の間に態々引証されてあるからである。この記事が流布本に載せられていない理由は、恐らくその余りに荒唐無稽に類する所から、こう云う破邪顕正を標榜する書物の性質上、故意の脱漏を利としたからでもあろうか。

予は以下にこの異本第三段を紹介して、聊巴毗弁の前に姿を現した、日本のDiabolusを一瞥しようと思う。なお巴毗弁に関して、詳細を知りたい人は、新村博士の巴毗弁に関する論文を一読するが好い。

旧版 等幅

破提字子と云う天主教を弁難した書物のある事は、知っている人も少くあるまい。これは、元和六年、加賀の禅僧巴毗弁なるものの著した書物である。巴毗弁は当初南蛮寺に住した天主教徒であったが、その後何かの事情から、DS如来を捨てて仏門に帰依する事になった。書中に云っている所から推すと、彼は老儒の学にも造詣のある、一かどの才子だったらしい。

破提字子の流布本は、華頂山文庫の蔵本を、明治戊辰の頃、杞憂道人鵜飼徹定の序文と共に、出版したものである。が、そのほかにも異本がない訳ではない。現に予が所蔵の古写本の如きは、流布本と内容を異にする個所が多少ある。

中でも同書の第三段は、悪魔の起源を論じた一章であるが、流布本のそれに比して、予の蔵本では内容が遥に多い。巴毗弁自身の目撃した悪魔の記事が、あの辛辣な弁難攻撃の間に態々引証されてあるからである。この記事が流布本に載せられていない理由は、恐らくその余りに荒唐無稽に類する所から、こう云う破邪顕正を標榜する書物の性質上、故意の脱漏を利としたからでもあろうか。

予は以下にこの異本第三段を紹介して、聊巴毗弁の前に姿を現した、日本のDiabolusを一瞥しようと思う。なお巴毗弁に関して、詳細を知りたい人は、新村博士の巴毗弁に関する論文を一読するが好い。

新版 プロポーションナル

破提字子と云う天主教を弁難した書物のある事は、知っている人も少くあるまい。これは、元和六年、加賀の禅僧巴毗弁なるものの著した書物である。巴毗弁は当初南蛮寺に住した天主教徒であったが、その後何かの事情から、DS 如来を捨てて仏門に帰依する事になった。書中に云っている所から推すと、彼は老儒の学にも造詣のある、一かどの才子だったらしい。

破提字子の流布本は、華頂山文庫の蔵本を、明治戊辰の頃、杞憂道人鶴飼徹定の序文と共に、出版したものである。が、そのほかにも異本がない訳ではない。現に予が所蔵の古写本の如きは、流布本と内容を異にする個所が多少ある。

中でも同書の第三段は、悪魔の起源を論じた一章であるが、流布本のそれに比して、予の蔵本では内容が遥に多い。巴毗弁自身の目撃した悪魔の記事が、あの辛辣な弁難攻撃の間に態々引証されてあるからである。この記事が流布本に載せられていない理由は、恐らくその余りに荒唐無稽に類する所から、こう云う破邪顕正を標榜する書物の性質上、故意の脱漏を利としたからでもあろうか。

予は以下にこの異本第三段を紹介して、聊巴毗弁の前に姿を現した、日本の Diabolus を一瞥しようと思う。なお巴毗弁に関して、詳細を知りたい人は、新村博士の巴毗弁に関する論文を一読するが好い。

旧版 プロポーションナル

破提字子と云う天主教を弁難した書物のある事は、知っている人も少くあるまい。これは、元和六年、加賀の禅僧巴毗弁なるものの著した書物である。巴毗弁は当初南蛮寺に住した天主教徒であったが、その後何かの事情から、DS 如来を捨てて仏門に帰依する事になった。書中に云っている所から推すと、彼は老儒の学にも造詣のある、一かどの才子だったらしい。

破提字子の流布本は、華頂山文庫の蔵本を、明治戊辰の頃、杞憂道人鶴飼徹定の序文と共に、出版したものである。が、そのほかにも異本がない訳ではない。現に予が所蔵の古写本の如きは、流布本と内容を異にする個所が多少ある。

中でも同書の第三段は、悪魔の起源を論じた一章であるが、流布本のそれに比して、予の蔵本では内容が遥に多い。巴毗弁自身の目撃した悪魔の記事が、あの辛辣な弁難攻撃の間に態々引証されてあるからである。この記事が流布本に載せられていない理由は、恐らくその余りに荒唐無稽に類する所から、こう云う破邪顕正を標榜する書物の性質上、故意の脱漏を利としたからでもあろうか。

予は以下にこの異本第三段を紹介して、聊巴毗弁の前に姿を現した、日本の Diabolus を一瞥しようと思う。なお巴毗弁に関して、詳細を知りたい人は、新村博士の巴毗弁に関する論文を一読するが好い。